

《新刊紹介》

南川高志『マルクス・アウレリウス－『自省録』の
ローマ帝国－』岩波書店、2022年、220頁

－マルクス・アウレリウス『自省録』の外部と内部について－

兼 利 琢 也

マルクス・アウレリウス『自省録』は人生論の古典である。わが国では神谷美恵子（1914-1979年）の翻訳（初出は創元社、1949年）が1954年に岩波文庫で出て以来広く読まれてきている。実際現在でも古代哲学の書物で最も流通するのがこの訳書であり、一般読者の求める修養と自己啓発の指導に重なるため、近年は需要に応じる平易な解説紹介も多い。だが少し前に同じ書肆から刊行された南川高志氏の新書『マルクス・アウレリウス『自省録』のローマ帝国』（岩波書店、2022年12月）は、その種の一般向け解説とは異なる。序文によると著者の卒論がマルクスのこの書、この訳書であった。以降、古代ローマの治世と領域に関し長年に亘り精緻な実証研究を重ねる斯界の第一人者が始点に帰り、この皇帝と『自省録』に捧げた一書である。著者は史家として、現代生活との関連付けが主となりがちな倫理的勧告の説明を避け（著書の成立と特徴の事実、ローマ帝政理解に不可欠なストア哲学の簡潔な概説がある）、この無類の書物の「背景」、著者の皇帝に関する史実、生涯と治績と時代の数々の出来事と主題を詳らかにする。本書を通じて初めて多くの読者は、『ローマ皇帝群像』をはじめとする数多の史料研究の裏付けの元に、他の解説本から知りえないこの書と皇帝に関する事実、書物そのものからは見えないマルクスの生と統治の現実を学ぶことができる。『自省録』に惹かれる読者——真実を愛する（とフロントー宛の手紙に自ら記す）この皇帝と志向を共有する読者に貴重な示唆、彼の生と時代の相貌の認識、確固たる史実の眺望への視界から、この皇帝の孤独な数々の章句の味読と理解に深い意義を与えてくれるにちがいない。

著者は、この古来称えられたローマ帝国の「輝ける時代」、その掉尾をなす哲人皇帝の統治に関するありがちな早計、善政は彼の奉ずる哲学の指針に拠るといった理解の誤りを正す。それは古来の父祖の伝統 *mos maiorum* の継承の帰結なのだ。著者の基盤は長年に亘るプロソポグラフィ研究、人材組織に残る人間行動の明白な軌跡の確定である。実証的な歴史学者がイデオロギーに対し保持する懸隔は、私もかつてサイム読書会と翻訳の長い取組みの中で強く心に刻まれた（R. Syme, *Roman Revolution*, 1939; 『ローマ革命』、岩波書店、2011年）。そこで最大限活用された彼のプロソポグラフィは、思想信条が政治の現実の動因たり

えぬことを徹底して証示する。サイムのキケローに対する評価は、政治活動は言うを俟たず、思想についても一貫してきわめて冷たい。南川氏もまた以前の達成、この手法で帝政下の人材の消長を綿密に突き止める研究の確かな基礎がある。フラウィウス朝の顕著な動向、ストア主義者の抵抗と言われる事態——その主導者の子孫にマルクスをストア哲学に誘ったルスティクスがいたが——もまた、人材登用の変化へに対する伝統側の抵抗の現れであり、つまるところ古来のローマ人選良のリアルな欲求、己と家におのずと備わる威信 *dignitas* を保持する行動であり、思想信条等の大義はボールにすぎないことが曝される。このリアリズムを真実を愛する者は受け入れる。それはペシミズムを孕まざるをえない(そしてこれを古代哲学は認めず、文学と歴史記述が引き受ける)。

ところで人脈の中と伝統の継承がローマ貴族マルクスの行動原理とすると、マルクスのばあい貴く希有なことに、模すべき手本は養父、自ら仕えた先帝ピウスその人だった。『自省録』1.16の長大なピウス称賛は紛うことなき彼の心の声である。そこに記し称えられるピウスの行動と心構え、状況と関係の中での彼の具体的な所作への想起的描写は、同時に彼の人間的理想像の提示である。それは哲学徒の章句ではない。じっさいマルクスは第2巻以降の断章で、ここに示された営為、生における真の己の役割の自覚と実現へのたゆまぬ努力を己に対して幾度繰り返し言い聞かせたことだろう。彼はそのピウスに哲学を重ねたのだろうか。理想の提示ならば、生の技法 *ars vivendi* たる哲学の約束、人間の完成態である賢者 *sapiens* と必然的に重なるはずである。だが彼が始めるのはピウスの己の義務に対する態度からである。そして章の最終箇所にとり、養父の食事など日常の振舞いをソクラテスのそれに比す。マルクスは現実から理想へと目を向けている。

歴史上の人物を範例に上げるのは古代の修徳文学の常套であり、セネカも哲学講述で間々行う。セネカがローマの賢者として語るのは彼の英雄小カトーである。しかしその描写の修辭の余剰に生み出される非現実さ(典型は『摂理について』2.7-12)が非リアルな抽象性を帯び、逆説的にも賢者の絶対性を称えるストア派の逆説とよくなじむ。その正反対が、空虚な修辭を厭うマルクスの養父への評言である。ストア学徒たる彼はその倫理学の理論講述の掉尾を飾る賢者像に馴染んでいた。またその乾いた概論の章句を己が血肉としていたことは、その記憶の想起と見なすべき、ストア派専用語彙になる数多の断章に明らかである。そうした哲学断章に彼の体験の追憶の断片が混ざり、時に融合する。この不思議な倫理書の無二の魅力を作り出すものの一つが、哲学の断片と歴史記述の断片の交錯である。

思想から理想をでなく、現実から理想を得ること——彼はこれを実感していた。ローマの伝統の輝かしい手本が、哲学的になりうる記述に確かな影響を及ぼす。それがこの『自省録』に、同時期の専門的ストア哲学者(倫理に限ればムソニウス、エピクテトス、ヒエロクレス)と比して、内実は同趣でも、きわめて異質で遥かに魅力に満ちた書となることをもたらしたのではないか。南川氏が神谷の解説を引用して賛意を表し、『『自省録』の言葉が与える力は、哲学の体系よりもマルクス個人の生きざまから生み出されたもののほうが大きいと

理解するのがよいと私には思われる」(p.19)と記す通りである。

そのマルクスの現実とは同時代の哲学教師のそれではなく、古代居住世界の中心、宮廷の現実だった。マルクスは有名な一節でそこを継母に準え、実母を哲学とした(6.12)。幸いにも養父は活ける美德だが、重い現実たる継母の宮廷は、偽善の悪徳が繁茂する園である。生真面目なマルクスには過酷な試練、だが彼は誠にストアの徒らしく受けて立ち、悪と苦難との戦いの中での徳の発揮自体に生の充足を得るべく努めただろう。その限りで「自己に向ける」章句は、現実の戦いに対する武具の確認と手入れというべきであり、自己に沈潜せる思索からほど遠い。そしてここでは現実が敵である。それに対する彼の真の戦い、統治の義務の遂行は、歴史の事実から知るほかない。『自省録』理解と味読にとって彼を実際に取り囲んだ事件に対する理解が与えてくれる示唆は果てしなく大きい。

同時に、そうした反省が誘う世俗的価値の卑小さの確認自体が、当時の哲学の不可欠な営みである(精神の勝利ゆえむしろ約束の代価でもある)。徳と精神の敵なる地上の現実に対する上からの眺めは、しばしば現実の地上世界を離れた理想郷の内面、哲学的知性からの俯瞰をなす。マルクスは万物の相互転換、有が無へ戻る自然の理をうべなう一方(それは自然の真実の確認ゆえ諦観を伴う)、神的なる叡知への回帰にも比す(なお、セネカはどちらもよりあからさまに語って分かりやすいが、控え目なマルクスのほうが心に残る)。このような時に現れるプラトン主義的または宗教的な憧憬、時代の感受性を反映する『自省録』の章句の内容解釈は、南川氏の考察があえて控える倫理思想の実態の扱いに連なるが、幸いこちらには、すでに古代後期哲学の泰斗の荻野弘之氏が『マルクス・アウレリウス「自省録」精神の城塞』(岩波書店、2009年)にゆき届いた解説を提供してくれる。前世紀末以降顕著なヘレニズム・ローマ期哲学研究の進展の中、ピエール・アドはとくに後期古代哲学に心的訓練をその本質要素とする観点から『自省録』自体を哲学的営為そのものとして解明した(Pierre Hadot, *La Citadelle Intérieure: Introduction aux "Pensées" de Marc Aurèle*, 1992)が、この解釈は現代でも主流をなす。南川氏と荻野氏の著作を合わせ読むことを通じて、マルクスと『自省録』の内外を学ぶことができる。

アドは日本では後期フーコーと繋がりで知られるが、フーコーの最初の紹介者は『自省録』の訳者、神谷美恵子だった。わが国の『自省録』受容においてこの訳者の意義は外的にも内的にも広く深い。『生きがいについて』でその卓越した才知と活力を知られる良心と実践の人が二十代初めに出会い深く傾倒して(聖書とあわせ)『自省録』を原書を繙いた十年あまりの後の戦後昭和初期、三十代前半の多端のさなか政府の仕事と育児の合間に紡いだ訳文には、この頃のこの人ならではの文力の力、若さと優しさが宿る。一昨年公開された神谷の書簡には、上皇后美智子さまが1965年に心の不安の相談に神谷と初めて面会された時のことがこう記される。「『自省録』のことを(美智子妃)殿下のほうから話を出され、皇太子殿下からよむようにすゝめられたとのお話で、中の文句まで暗称[唱]しておられるのには恐縮致しました」(神谷美恵子書簡8-1, 1965年(昭和40)年7月21日、pp.36-7,

『昭和天皇拝謁記 7』、岩波書店、2023 年)。神谷訳なればこそである。神谷は序文解説で(アーノルド、ルナン以来のほぼ決まった評言に近いが)『自省録』が無味乾燥なストア哲学の限界を超えたと言う。「この(理性に伝わるも感情に訴えない)ストア思想も、一度マルクスの魂に移ると、なんという魅力と生命とを帯びることであろう。それは彼がこの思想を実をもって生きたからである。生かしたからである」(訳書、p.317)。私もまた、留保はあるけれども(『自省録』が文体と内実ともに文学的伝統に立脚することを提示する R.B. Rutherford の研究により共感するため)、この言葉は正しく感じられる。アーノルドが『自省録』英訳について記したように、修徳の書は教養人全般に読まれるべきものとして文飾より内実が大切で、本書は母語で広く読まれるだろう。神谷訳は他の二種の現行翻訳より古く、両者ほど哲学研究に根ざしてはいない。だがこれを越える訳は困難である。戦後昭和史に不朽の事績と名を刻む、マルクスと同じ真率な人格者かつ行動者の心底からの共感が作り出した訳文は、これからも生と行為の苦難に心の励ましと基礎を与えてくれるだろう。人が『自省録』を手にする切掛けは心の悩みの解決を求めてかもしれない。それが機縁となり、教養の伝統と古人と古代の真実、とりわけその知の成果を生み出した輝ける古典古代の歴史への関心が常に再び呼び起こされることを心から願う。